

[書評論文]

北川真也著『アンチ・ジオポリティクス： 資本と国家に抗う移動の地理学』*

川久保 文紀

はじめに：「争われる現実」としての地政学

地政学ブームである。書店の特設コーナーには、地政学を冠した様々な書物が陳列されている⁽¹⁾。ロシアによるウクライナ侵攻、ハマスの攻撃に端を発するイスラエルのガザ侵攻、トランプ米国大統領によるグリーンランド購入やパナマ運河の支配権獲得に関する発言に代表されるように、国境線の引き直しや土地をめぐる争いが世界中で再燃し、政治に対する地理的条件を考察するいわゆる地政学が復活を遂げているかのようである。第二次世界大戦後、「悪の学問」として忌避されてきた嫌いのある地政学であるが、このような混迷を極める現代の国際秩序を読み解くうえで地政学的な見方は必須であるというような論調さえある。地政学(的な見方)で果たして分断と対立を深める世界を読み解くことができるのか。

本書全体を通じて著者は、国家中心主義、領土拡張路線、植民地主義などの覆いを被った大文字の地政学の流行に警鐘を鳴らす。大文字の地政学で満たされた世界の在り方に違和感をもち、ノー・ボーダー運動に代表されるように、グローバル規模で縦横無尽に繰り広げられている国境を打破する闘争とその軌跡にまなざしを向け、世界の亀裂・逸脱からスタートしようとする。これが著者のいう反地政学(アンチ・ジオポリティクス)の叫びであり、日々の生活や労働のなかに人間を位置づけることによって地政学を逆照射する。国益むきだしの地政学の力学と衝突する場所において垣間見える人間の主体形成や身体性に

*北川真也著『アンチ・ジオポリティクス：資本と国家に抗う移動の地理学』青土社、2024年。

(1) 最近では、以下の特集が編まれた。「特集：地政学で読み解く2025年の世界」『中央公論』2025年2月号。

この特集の冒頭では、「混迷の時代にこそ、地政学は甦る。国際情勢の予測不可能性が高まる中で、地理的条件は不変であるからだ」と述べられている。北川氏は、批判地政学の文脈において、「地理は本当に不変なのだろうか」と問い、地理は政治という「劇」の背後にある「舞台」でもなければ、この「舞台」それ自体が、地政学という知的・実践的な問題系の内側のなかで創出されていると主張する(北川『アンチ・ジオポリティクス』28–30頁)。なお、本書評は、科研費(基盤研究B)「ポピュリスト分析のための「安全保障化」の再検討：定性的・定量的手法の融合」(代表：今井宏平)の研究成果の一部でもある。

着目しながら、多様な地理的現実に対する感性を豊かにし、国家や支配者の視線で語られてきた地政学では見ることでできない現実を目を向ける。本書は、世界中でみられる亀裂・逸脱のなかに人間の欲望や情動を見出し、人々の日々の営みのなかに地政学を位置づけようとする野心的な試みであり、本書に通底するメッセージを踏まえれば、地政学それ自体が「争われる現実」なのかもしれない⁽²⁾。

1. 本書の構成と内容

本書は四部構成であり、それぞれに二つの章が所収されている。

第I部 地政学から逃れて——地政学と反地政学

第1章 地図からあふれだす流転の地理——地図学的理性を超える地球の潜勢力

第2章 ヨーロッパ「市民」がいなくなった後で——地中海をまたぐ反植民地叛乱としての移民運動

第II部 囲い込む収容所、逸脱する移民運動——生政治と地政学

第3章 「移動」が「運動」へと生成変化するとき——国境の移民収容所からの問い

第4章 「歓待」という名の生権力を脱することはできるか——収容をめぐるパラドックス

第III部 ロジスティクスとインフラによる戦争——資本主義と地政学

第5章 シームレスな流動を夢見るロジスティクスの暴力——労働と生の支配、遮断と封鎖による叛乱

第6章 都市化する惑星が生み出す「まだら状の大地」——つながる街、つなげる道、棄て置かれる街

第IV部 ヨーロッパから東アジア／日本へ——流動する反地政学

第7章 労働力を包囲するロジスティクス、逃亡がひらく移動コモンズ——「寄せ場化」する社会の地理学

第8章 共鳴するノー・ボーダーの叫び——「難民特権」言説批判から「すべてを欲する」叛乱へ

あとがき／初出一覧／文献一覧

第1章は、従来型の国家中心主義にもとづく地政学の在り方について、批判的検討を試みる。地理は「不変」であり、地政学は「真理」であるという命題に対して、批判地政学の考え方を参照しつつ、「地球の潜勢力を凍結してしまう」地図学的理性を問題化し、反地政学的な地理の生成を喚起する。世界が地図上にすべて可視化されてしまうという地権力の傲慢さに対する知的反発であり、地図に刻む／刻まれることの困難さを意識しながら、不可視な移動性や流動性とどのように向き合うのかを問い、「地図学的理性が地球を空間化す

(2) ラウンドテーブル(現代地政学事典編集委員会編『現代地政学事典』丸善出版、2020年)、パネリスト：高木彰彦、山崎孝史、古川浩司、香川雄一、川久保文紀、北川真也、モデレーター：岩下明裕「地政学ルネサンスを超えて：地理学と政治学の対話」『境界研究』No.11、2021年、北川氏の発言部分、62頁。

るその瞬間から、そこには逸脱と断絶からなる特異な諸地理が刻印＝創造されてきたことを断じて忘れてはなるまい」とする。

第2章は、地中海を經由してヨーロッパへと渡る移民の運動は、自由と平等を求めた「反地政学的欲望」の発露として捉えることが可能であり、過去の植民地主義とは形態の異なる「反植民地叛乱」であると主張する。イタリア最南端に位置する地中海の国境の島ランペドゥーザは、古典地政学が前提とする地理的条件によってではなく、「ポストコロニアルな境界体制の暴力」が行使され、国家によって境界化された「移民の島」である。地中海は移民に対する戦争が行われ、「雑多な群衆」によるオルタナティブな政治が創造される空間になっており、ノー・ボーダー運動は、ヨーロッパという暴力的な政治空間に対抗する戦略でもある。

第3章は、国家と領土を所与とするアガンベンに対する批判的考察のうえにたって、移民運動の主体形成について論じる。人種化された眼差しによって「不法移民」として一括りにされる問題性や、領土の縁としての国境に位置する収容所の特殊性を素材としながら、国家による超法規的措置の発動による例外空間について分析を加える。著者は、近代の地図学的理性にもとづくアガンベンの「剥き出しの生」の理解に疑問を呈し、移民の主体形成のプロセスが収容所の空間変容に対してインパクトを与えていると主張する。ランペドゥーザの収容所は、アフリカなどからの移民の流れをせき止める「地政学的境界」ではなく、移民の身元照会を継続的に行う「生政治的境界」でもある。拘禁・収容という形態での封じ込めは、資本主義の論理にもとづく「不法労働力」として移民運動を巧みに「飼い慣らす」統治方法でもある。

第4章では、収容所という空間が、第3章で分析した拘禁ではなく、受け入れ社会における無条件な「歓待」という行為からみえてくる主権権力の暴力性について考察する。収容所は、多様な形態をとりながら出現し、移民女性や難民に対する家父長制的権力の立ち上がりなのである。アテネのスクウォット空間「シティプラザホテル」などを事例として、拘禁すると同時に受け入れるという行為から収容所の植民地主義的な系譜をたどる。

第5章では、本来、「物流」を意味することの多いロジスティクスに焦点をあてながら、これが現在、国境横断的な地経学的経路を形成し、グローバルな資本主義空間の根本原理になっている諸相を明らかにする。資本のロジスティクスは、領土的主体としての国民国家が描かれる世界地図とは異なる形でグローバルに広がる複雑な地理を形成し、「無数の暴力」を生み出している。世界全体がひとつの工場であるかのように、ひとつの商品が多く地点を經由して生産・流通される「サプライチェーン資本主義」は、「グローバルな接続過程」である同時に、多数の労働者を著しく不平等な関係に組み込む過程でもある。この文脈において著者が問題化するのが、イスラエルによるパレスチナへの占領のロジスティクスである。ガザ地区を封鎖することによって物資や食料などを遮断し、経済

的・軍事的にばかりではなく、住民の生を衰弱させ不安定にする生政治的な権力が作用しているが、パレスチナからは不可視のトンネル建設や港湾からの闘争によって、「対抗ロジスティックス」が発生している現状を明らかにする。

第6章では、「惑星都市化」という概念によって、ロジスティックスとインフラが生み出している不均等な接続性と分断される地理のありさまについて述べられる。グローバル化の地理によって世界各地を結ぶ「高速の軌道」が増殖し、「接続と素通り」の地図が形成され、「迂回され、スキップされる場所」が多数出現している。こうした都市化の地理的現象を、都市研究者ニール・ブレナーは「まだら状」と呼ぶわけであるが、「軌道によって接続される空間と、その軌道によって迂回されたり、素通りされたりする場所」が無数に生み出されることによって、「まだら状の大地」には、ロジスティックスとインフラをめぐる様々な主体による抗争と叛乱の地理が出現している。本章の末尾では、「惑星工場」という概念を用いて、陸や土地ばかりではなく、海洋、空、地下という惑星を球体的に把握する視座が不可欠であると主張され、人類が生態系に甚大な影響を及ぼしてきた人新世時代の地理を切り拓く地球という存在を可視化した議論が重要になると論じている。

第7章と第8章では、議論の舞台がヨーロッパや地中海から東アジアや日本へと移る。

第7章は、「社会の総寄せ場化」という考えを中心として、ロジスティックスの論理が社会にどのように浸透してきているのかを日本の技能実習制度を素材として描き出す。「ジャスト・イン・タイム」かつ「ピンポイント」で労働力を供給するという現代のロジスティックスは、企業利益の最大化のために遅延を最小化し、適切な費用で適切な時間に適切な場所へとインフラを通じて労働力を送り込む戦略である。まさに、「生きた労働の全方位的な労働力商品化」を強力に推進する資本主義のロジスティックスの全面化である。こうした動きに対して、著者は「移動の自律性」という観点から「逃亡」や「失踪」という移民運動をクローズアップし、技能実習生によるそれらの行為は、支配や搾取にまみれた資本主義の現実を改変させてきた潜勢力だとする。

第8章では、「難民特権」言説を批判的に検討しつつ、ノー・ボーダーという反地政学的な思想や実践を探る。「偽装難民」などの言説に表されるように、難民のなかには国境管理を出し抜き、到着した国において「難民保護」や「人権保護」という名のもとに税金で生活しているという批判がある。著者は、こうした言説の不正確さに警鐘を鳴らしたうえで、「難民問題」を正しく理解する必要性を説く。「無条件の生の肯定」としてのノー・ボーダーへの叫びは、オペライズモ(労働者主義)の「すべてがほしい」という欲望の政治へと活路を見出ししていく。

2. 本書の特徴と問題意識

本書は、題名が表しているように、反地政学、すなわち、これまでの国家や領土を前提

として組み立てられてきた、古典地政学に対するアンチテーゼである。古典地政学は、国家や領土で色づけられた地図学的理性による思考の枠組みであり、この世界の基層をなす普通の人々営み、欲望、振る舞いを軽視してきたのではないか。著者が目指すのは、「地球規模で形成される地理に着目することを通じて、この世界の広がりやどのようなものであるかを検討し描出すること」であり、国家や権力エリートによるパワーゲームが織りなす大文字の地政学だけでは可視化できない小文字の地政学に肉迫しようとする。人間や商品の移動の軌跡によって場所と場所がつながり、その流動の軌跡から多面的かつ球体的な世界の在り方を描こうとするオルタナティブな地理的視座の提示ということもできる。

本書を読み進めていくと、世界は単に平面ではなく、縦横無尽に惑星をうごめき合う多様なアクターの存在からなっているという地理的想像力を駆り立ててくれる。本書のなかで登場する地中海を命がけでわたる移民たち、イタリアの労働運動であるオペライズモやアウトノミア、ミラノを舞台としたスクウォット、イスラエルによって人権を蹂躪されるガザ地区の人々、日本の下層労働者と位置づけられる人々、搾取・支配される技能実習生は、彼ら／彼女らが置かれている場所や時間が異なるとはいえ、この世界に組み込まれた権力や資本に反動する主体性や過剰性を内在させた統治不能な存在でもある。「無数の軌跡が集う場所だけではなく、場所と場所を接続するこの軌跡そのもの、移動の軌跡そのものに」対してまなざしを向ける必要性があり、移動の軌跡それ自体が、「国家や資本を拒否しながら、そこから富を再領有しようとしながら、おのれの生きた労働を、そして集団的にしか形成され存在しえない生きた労働としての生を、最大限に、無条件に肯定する闘争」でもある。

北川氏は、自身に大きな影響を与えたイタリアの社会理論家サンドロ・メッザードラの著作『逃走の権利』をかつて翻訳し、日本に紹介したが、問題意識の地平はつながっている。移民とは、他の人間や集団との連帯によって「移動の自律性」を高められる存在であり、みずからの将来のために様々な機会を求めて国境を越えることを主体的に決定し、グローバルな資本主義や国家によって翻弄されない逃走するための闘争の権利を有している⁽³⁾。グローバル化の時代にあっても、移民の受入社会と送社会という国家的基盤に基づく政策的論理が強調されるが、移動することを決定した移民たちの権利行使を分析の中心におく点が斬新である。そして、北川氏は、メッザードラであれば、「地理が変容する

(3) サンドロ・メッザードラ著、北川真也訳『逃走の権利：移民、シティズンシップ、グローバル化』人文書院、2015年。メッザードラは、以下のようにも論じる。「逃走とは、何よりもまず、移住過程の主体的次元を示すものとして理解される。つまり、この主体的次元によって、移住過程に備わる社会運動の性質が浮き彫りにされるのだ。またそれによって、経済学的あるいは人口学的摂理といった『客観的な』諸要因によって自動的に引き起こされる『自然な』類への過程へと、移住のそれが還元されるのを阻止できることになる。」(13頁)、また、評者はこの翻訳を以下で書評した。川久保文紀「(書評論文)グローバル化時代の移動：移民と難民の揺らぐ境界」日本国際政治学会『国際政治』169号、2019年。

のは抗争を通じてにほかならない」と述べたであろうとし、支配と暴力の地理とは別な形で形成される、「ときに可視的でときに不可視な地理の政治的潜勢力」に着目する重要性を以下のように述べる。

従来の国家の地政学とその地理が消え去ったわけでは些かもない。けれども、ひろがりゆく多数の軌跡、そしてそれらが織りなす地理を捉えるには、それだけではまったく十分ではない。それゆえ、本書では、蓄積される批判的な地政学研究を通して「地政学」の枠組みを拡大したり、それを他の主題や問題系——収容所、生政治、惑星都市化、ロジスティクス、インフラなど——と交差させたりすることで、こうした軌跡がつくりだす地理、こうした軌跡によって横断され再編される国家・領土の地理、さらにはこうした軌跡に宿る逸脱的で叛乱的でもある——いわば反地政学的な——うごめき、表現、実践を捉えたい⁽⁴⁾。

このようにみると、移民研究において支配モデルとなってきたプッシュ・プル理論や移住システム論などの理論的な妥当性が問われることになる。これらの説明にもとづけば、移民のフローが客観的な要因や構造へと還元され、移民の越境的な実践による境界を多孔化することや、領土の一体性から帰属意識が解かれていくプロセスを説明することが困難になる。

さらには、北川氏はフローという概念の用い方にも疑問を呈する。事物が自由に浮遊するようなイメージを与えるフローという概念によって、資本と移民労働者が出会う労働市場を非地理的・非空間的な場所として想定してしまう。「社会の総寄せ場化」のなかで、資本がさまざまなインフラを通じて移民や労働者を暴力的な方法で経路づけ、目的地へとジャスト・イン・タイムで送り込む戦略は、グローバルな規模で張り巡らされたサプライチェーン資本主義の全面化であり、戦争における兵站や生産後の流通という伝統的な意味を発展的に解釈したロジスティクス革命とも呼ぶべき現象なのである。

おわりに：若干の問題提起

国際関係における人の移動とは、領土や国籍にもとづいて存立する国民国家が、国境を越える国民以外の人間を選別するプロセスやメカニズムとして理解され、人の移動の形態を分類する際のひとつの尺度は、どのようなカテゴリーに属する人間として国境を越えるのかということである。国家は「容器」であり、そのなかにひとつの主権、ひとつの国民、ひとつの領土が入っていることが自明視されるような前提で「近代地政学的想像力」⁽⁵⁾はつくられてきた。こうした前提にたつとき、ひとつの国家に属することが通常であり、そこから逸脱することが異常であるという見方が支配的であった。

(4) 北川『アンチ・ジオポリティクス』、19–20頁。

(5) John Agnew, *Geopolitics: Re-visioning World Politics*, second edition (London: Routledge, 2003).

移動することが国家にとっての安全保障上の脅威と認識されてしまうことが多い現代において、国家が移動を管理し、国民の安全を供給する唯一の領土的主体であるとみなされがちであるが、これは本当に正しいのだろうかと問いたくなる⁽⁶⁾。国家＝国民＝安全という三位一体的な関係は、本書で描かれる「地図からあふれでる流転の地理」によって大きく碎かれ、国家のナショナルな輪郭にもとづき固定的に理解されてきたシティズンシップ概念も再考に付されることになる。本書で登場する、地中海を命がけでわたってくる国境の島ランペドゥーザにたどり着く人々、メガイベントとしての万博に路上で抗議する人々、日本の建設現場で「失踪」や「逃走」を試みる技能実習生などは、遠く離れた場所とはいえ、境界をすり抜け、お互いの叫びが共鳴しあう存在として描かれており、こうした問題意識からは、移動の自律性や運動を基軸とする可変的なシティズンシップ概念が創出されるかもしれない。

ただし、移民の運動論に潜む陥穽にも目を向ける必要がある。とくに難民を支援する文脈において、行為の主体性や移動の自律性を強調する「急進的な運動論」に化してしまえば、包摂の論理だけが肯定的に評価され、排除が否定されるという単純化された思考様式に陥りやすい⁽⁷⁾。包摂と排除、あるいは開放と閉鎖は同時に生起するという国境の機能論的な認識にたち、とどまる／とどまらざるえない人々に対してもまなざしを向け、人が移動する要因を多面的に理解し、その構造的条件に分析のメスを入れていく必要もあるだろう。

最後に、本書全体を貫く反地政学的な思想と実践としてのノー・ボーダー運動に触れておきたい⁽⁸⁾。著者は、イタリアを中心とするヨーロッパの豊富な事例を紹介しつつ、増殖する境界に対して挑戦する移民のアクティビズムを活写した。移民運動は新自由主義的なグローバル化に対抗する多くの運動ネットワークと結びつく形で、「生の無条件の肯定」としてのノー・ボーダー運動へと結実していく。これは、1990年代におけるヨーロッパの共通移民政策という「暴力的な境界化」に対抗することを出発点としており、新しい政治空間が形成されることへの反発でもあった。評者は、2019年にテキサス州のサンアントニオで開催されたボーダー・セキュリティ・エキスポに参加し、連邦政府、セキュリティ産業、

(6) こうした点については、以下を参照されたい。柄谷利恵子「「移動」は政治学・国際政治学に何を問うのか」日本政治学会編『年報政治学：移動という思考』2024-II、2024年。

(7) 墓田桂『難民問題：イスラム圏の動揺、EUの苦悩、日本の課題』中公新書、2016年、232頁。

(8) 本書評を執筆している際に、以下の翻訳が刊行された。グレイシー・メイ・ブラッドリー、ルーク・デ・ノローニャ著、梁英聖、柏崎正憲訳『国境廃絶論：入管化する社会と希望の方法』岩波書店、2025年。このなかで、国境廃絶とは、「経済的正義、人種の平等、持続可能な生態系といった目標を含む、より広範な諸闘争の内部に位置づけられる革命的政治」であり、国境なき世界を建設するための第一歩として、「国境がこの世界で一体何をしているのかについての、私たちの集団的な理解を発展させること」が必要と述べられている。また訳者による「日本の読者のための解題」において、北川氏の本著作にも触れながら、欧米を中心とした国境闘争の歴史と現状について考察が加えられている。

(9) 川久保文紀『国境産業複合体：アメリカと「国境の壁」をめぐるボーダースタディーズ』青土社、2023年。

研究機関などが一体化した国境産業複合体の実態を観察する機会に恵まれたが、会場の外で“*No Border!*”という旗を掲げた人権活動家によるデモが行われていた⁽⁹⁾。このように、ノー・ボーダー運動はヨーロッパだけでの現象ではなく、グローバルな規模で広がりを持ち、2025年のトランプ大統領の再登場によって、米国の国境管理がますます強化される状況のなかで、こうした運動および運動の集合体を突き動かす主体形成がさまざまな地域や国で昂進化されることになるだろう⁽¹⁰⁾。

ノー・ボーダー運動が目指す世界はどのように描かれるのであろうか。運動の単なるスローガンやラディカルな思想と切り捨てられないためには何が求められるのか。著者のいうノー・ボーダーとは、国境を廃絶することなのか、あるいは国境をつくりかえるということなのか。国家との向き合い方をもう少し提示することも必要であったかもしれない。冒頭でも述べた大文字の地政学では読み解くことのできない人々の日常的な営みとそれを守ろうとする闘争のなかに、反地政学の思想的真髄を見出すのであれば、既存の国民国家体制や国民という単位にもとづく固定的なシティズンシップの在り方に対する批判的な問題提起をあらゆる領野で継続的に行っていくことだろう。国境と領土で区切られ国民国家体制は、封建制、帝国、植民地主義などの後に生まれた新しい政治体制であり、世界の多くの国家は西欧列強による植民地から解放・独立した苦難の歴史をもっている。国民という概念は近代の所産であり、国家と国民の齟齬から生じる分離・独立を目指す紛争は今でも後を絶たない。

現代の国境は、国家や国民の境界という制度的側面ばかりではなく、さまざまな格差、不平等、不正義を具現化したボーダーでもあり、国境に倫理的根拠が求められる所以である。ノー・ボーダーへの道筋を示すことは容易ではないが、国家による暴力が人権を抑圧し、人の自由な移動を妨げる国境の壁が長大化し、グローバルな監視体制が構築される世界の現況を鑑みれば、「国境とは何のために存在するのか」という問いに対して真正面から向き合う反地政学的な闘争の広がりには、「すべてが欲しい」という生の欲動に駆り立てられた移民たちの叫びへと通じるのである。

(10) Todd Miller, *Build Bridges, Not Walls: A Journey to a World Without Borders* (San Francisco: City Lights Publishers, 2021).